藤女子大学 図書館だより

Fuji Women's University Library

CONTENTS

1. 図書館という「場所」について
藤女子大学図書館長　木村　信一
3. 新規データベース利用案内
4. セネガル図書館訪問記　川邊　蓉子
6. 学生による企画展示
7. 図書館からのお知らせ
8. 図書館資料Navi　第1回

No.85
2013.4

図書館という「場所」について

藤女子大学図書館長
木村　信一

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

これからはじまる大学生活のなかで、少なからぬ時間を皆さんが過ごすことになる藤女子大学の図書館について、ご紹介します。

私自身の40年前の経験に照らしてみても、入学したての新入生が「これが大学なのだ」と最も深く実感する場所は、おそらく図書館でしょう。中学・高校の図書室とは蔵書の数が桁違いに異なりますし、蔵書の種類も違います。当然、占めるスペースも格段に広くなりますが、何より印象が強いのは、その場所のもつ佇まいの違いではないでしょうか。大学という教育研究機関が拠って立つ知識・情報の基層がいまここにあるという独特の雰囲気が、大学の図書館には流れています。

大学図書館が担う役割の一つは、的確な学術情報を収集・提供することによって多岐にわたる研究活動を支えていくことにあるのですが、それに劣らず重要な役割として、学生の自主的な学習のための環境を整え、必要な学習支援をおこなうということがあります。というのも、大学図書館は、授業の空き時間の多くを学生がそこで過ごすための「居場所」になるからです。図書館は、皆さんが授業の予習や復習をしたり、授業で紹介された書籍を実際に手にとって感触を確かめたり、レポートを作成したり、そのための調べものをしたりする場所ですし、授業とじかに関係はなくとも、書架の間を歩いてまわって、興味を引いた書籍を取り出して読んでみたり、文化の基層にあるさまざまな課題について想いを巡らしたりする場所が、図書館なのです。私の学生時代には、読みはじめた本が面白すぎて、授業のほうを欠席してし

次ページへ続く↗

まうなんていう本末転倒も、少なからずありました（これはお奨めできませんが）。

さて、藤女子大学には二つのキャンパスがありますから、当然ながら、それぞれのキャンパスに図書館（北16条本館と花川館）があります。本館には主として文学・人文科学系の資料が収められ、花川館には社会科学・自然科学系の資料が中心に収められています。合わせると、36万冊を超える資料が本学の図書館には所蔵され、ほぼすべての資料を直接手にとって利用することができます。こうした紙媒体資料とともに、主に研究のための学術情報基盤として、電子ジャーナル（2パッケージ）や電子データベース（8種類）などの電子媒体資料の整備も進められています。

図書館の電子化といえば、一昔前までは、図書館の入り口のところに、おびただしい数の目録カードを収納するカードBoxが所狭しと並べおかれているという風景が当たり前でした。何列にも並んだカードBoxの引き出しから、お目当ての書籍の目録カードを探し当てる作業は、それ自体がどこか「知的探索」のオーラを帯びていて、学生たちが棚の前で熱心に目録カードを繰っている風景は、いかにも図書館らしくて、私は好きでした。しかし、いまでは、どの大学の図書館でも、パソコンを使ったオンライン検索が普通になっています。手元にパソコン端末さえあれば、いつでもどこからでも検索ができるようになりました。ちょっとそっけないくらいですが、図書や資料の検索が従来とは比較にならないくらい簡単便利になったことは事実です。検索の仕方などについては、新入生の皆さんには、図書館ガイダンスなどで詳しい説明を受けていただきたいと思います。

こうして情報の電子化が進んでいけば、図書館自体がサイバー化し、電子化された情報の蓄積と提供の機能そのものに還元されてしまい、建物としての図書館は要らなくなる、という議論もあったりします。しかし、最初に書きましたように、大学の図書館には、一人一人の学生のそれぞれの「居場所」としての、大切な役割がある、と私は思います。単なる「機能」ということに回収しきれない、図書館という「場所」がもつオーラがあるのです。藤女子大学で学んだ人たちが通いつめた歴史がそこに染みついていますし、そこに収蔵された古今の書籍との交わりのなかで先輩たちが巡らしたさまざまな想念までが、残像としてその場に漂っているようにも思います。その意味で、学生の皆さん、とくに新入生の皆さんには、何層にもなる書庫を歩き回りながら、「知の宝庫」の広さや奥行きをぜひ味わってほしい、と切に願うものです。

幸いなことに、藤女子大学の図書館は、日本の数ある大学図書館のなかでも、学生の利用状況がすこぶる高いことで知られています。毎年発行される週刊朝日編の「大学ランキング」でも、本学の図書館は、学生一人あたりの平均貸出冊数でつねに全国ベスト5を確保しています。単なるパソコン上の電子情報の提供や受領という抽象レベルではなく、実際に図書館という場所に足を運んで、書架を巡って、書籍を手に取るということが、藤女子大学では、どの大学にも増して活発におこなわれている証拠です。図書館は、本学が抱える施設のなかでも、特別な意味をもつシンボル的な「場所」としての役割を果たしてきているといえます。

さて、近年の動向として、多くの大学の図書館は、自学自習の場としてのその歴史的な役割をさらに発展させる方向で、さまざまな試みに取り組んでいます。本学が現在おこなっている取組としては、たとえば、シラバス掲載図書や講義関連図書を学習基本図書として位置づけ、できるかぎり多くの学生の皆さんに利用してもらえるように努めていることがありますし、以前から教員指定図書コーナーを設けているのも、そうした取組の一つです。両キャンパスとも、限られた図書スペースをできるだけ効率的に活用し、あらゆる書籍を皆さんが実際に手に取って読むことができる環境の整備にも努めています。これらは、学習支援の「機能」を改善していく取組であり、今後とも、皆さんの要望に耳を傾けながら、学生生活の充実のために必要な役割を、図書館として果たしていきます。

そのうえで申しますと、多くの学生たちに長く愛されてきた「場所」としての図書館のあり方を、今後どのように発展させていくかということが、いま最も大切な課題の一つであると考えています。本を読んだり、ものを考えたり、勉強したり、レポートを書いたりする場所としての図書館のあり方をもう少し広げて、必要な資料や情報が手に入る環境のもとで、各自が抱える課題を披歴しあい、互いに意見を述べあったり、情報や知識を交換しあったりしながら、問題を共有していくことができる場所として、図書館の「知的生活空間」を発展させることは可能だろうか、検討を深めていきたいと考えているところです。

■新規データベース 利用案内■

日本文学Web図書館
Web Library of Japanese Literature

日本文学を研究するうえで手にすることが多い『新編国歌大観』。

はじめは冊子体全10巻。時代とともにCD-ROM１枚になり、そしてついにWeb版と、より手軽になりました。Web版では『新編国歌大観』だけではなく『私家集大成』も同時に検索することができます。一度にアクセスできるのは５名までとなっていますが、CD-ROMを使い回していた今までよりもずっと便利になりました。また、学外からのアクセスも可能で、カウンターで申し込み手続きを行っています。

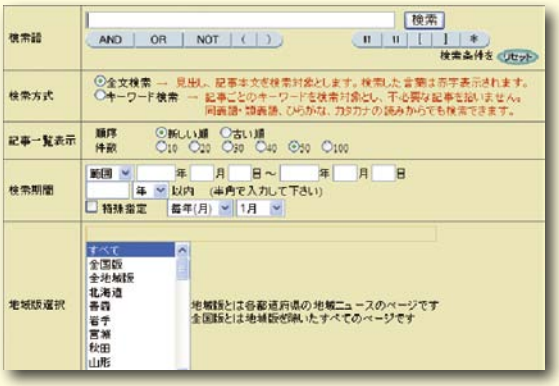
検索の仕方は簡単です。検索BOXに和歌の句を入れるだけで全歌集から結果を出してくれます。進化した機能で和歌の検索をしてみてください。学習のスピードも今までとは違ったものになりますよ。

ヨミダス文書館

※2012年８月から導入

「ヨミダス文書館」では1986年９月以降の読売新聞の記事をオンラインで読むことができます。約600万件の新聞記事情報の中、2008年12月以降の記事には切り抜き紙面イメージが付いており、実際の新聞と同じように記事を読むことができます。このほか英字新聞のThe Daily Yomiuriが読めるほか、現代人名録のコンテンツもあります。現代人名録には国内外の約26,000人のプロフィールが登録されており、同人物に関する記事をワンクリックで検索できます。

導入済みの「日経テレコン」に加え、新聞を検索するときにはぜひ「ヨミダス文書館」も活用してください。



※図書館ホームページのトップからご利用いただけます。（学内PCのみ）

セネガル図書館訪問記

本学事務職員に、アフリカの国セネガルの図書館を訪れたときのことを書いてもらいました。
この図書館訪問は、私立大学図書館協会2011年度海外認定研修助成を一部受けています。

川邊　蓉子

日本から遠く離れた国セネガル、まさに“異国”のイメージを持っているのではないでしょうか？しかし、セネガルにも日本と似たような文化・習慣があります。例えば、人の誘いに対し直接的な断り方は避けることや、本音と建前が日常会話の中で使われたりすることが挙げられます。そんなセネガルに私が行った目的は、JICA の活動に従事している友人を訪問することとサバシー・チャム村小学校図書館でボランティアをすること、そしてソコン市と首都ダカールにあるシェイク・アンタ・ジョップ大学の図書館を訪問することでした。今回は、私が見たセネガルの一部とソコン市の図書館について少しご紹介します。

パリダカのゴール地点でも知られるダカールには、ヨーロッパや中国企業が進出しているため、高層ビルが立ち並び、ジェラートやケーキなどが日本と同じような値段で売られています。一方、ダカールから車で数時間走れば、舗装されているのはメインストリートのみで、道のあちこちにロバや馬などが歩いている風景に出会います。私がボランティアをした村には、電気や水道は通っておらず、懐中電灯や井戸水で生活していました。懐中電灯が村では主流ですが、学校や一部の民家ではソーラーパネルを設置しているところもあるようです。ちなみに、移動はセットプラスという7人乗りのタクシーを利用しましたが、ダカールを離れると道路事情は一変しました。砂の上に舗装道路を作っているので年月が経つと道路に穴が空いてしまい、穴を避けながら道路脇や対向車線側も走行します。

セットプラスはセネガルではポピュラーな乗り物ですが、乗客が7人揃うまでは発車しない為、出発まで3～4時間待つこともあります。また、途中で乗客がいればすでに7人乗っていても、それ以上の人数を乗せるのです。クーラーもなく、硬い座席で、体格の良い人が乗車した時なんて狭いし、汗の匂いはするしと、とても快適とは言えない状況での移動になりますが、私は車が揺れる度に頭を車の窓ガラスにぶつけつつも寝続けたようで、時差ボケもなく元気にソコン市に到着出来ました。

ソコン市には、事前に図書館があるのか情報を得られないまま向かったため、突撃訪問になりましたがスタッフは快く対応してくれました。（実際は、図書館に入ると誰もおらず、スタッフが戻ってくるまで待ちましたが、そんなことは日常茶飯事です）ソコン市にある図書館は、1995～1996年に市長によって設立され、フランスのボ

ランティア団体が図書を寄贈したことから始まりました。現在は、ベルギーのボランティア団体が支援しており、図書館が必要なものをリクエストし、ヨーロッパから送ってもらうことで支援が成り立っています。利用者は年間利用料 200 ～ 1,000 FCFA（日本円で 40 ～ 200 円程度）を支払い利用していますが、大まかに子ども・中高生・大人と 3 つの料金形態に分かれています。貸出期間は 2 ～ 3 週間で、貸出・返却記録をつけて管理していました。

図書館の広さは 100 ㎡程度で、壁際には 6 段架の木製書架が並んでいました。しかし、湿度が高い為木製書架は大きく歪み、使用されているのは 4 段程度でしたが、おそらく 2,000 冊は配架されていたでしょう。その他、図書館の隅にある机の上には雑多に図書が積まれていました。机の横にはパソコンも置かれていましたが、以前 4 台あったパソコンも、2 台が紛失し、1 台は故障したようで、現在使用出来るのは 1 台のみとのことでした。大型の薄型テレビのような家電製品も部屋の隅に置かれていましたが、パソコンと同様に使われていないとのことでした。物質的支援は受けているけれども、運営・管理に関することはわからないという状況でした。それもそのはずで、図書館に勤務しているスタッフは、市役所に行って職を求めたら図書館で働くように言われたとのことで知識は一切ないからです。（セネガルの大学図書館に勤務する場合は、EBAD という図書館情報学課程を卒業する必要があります）その為、資料の修理方法もわからず、傷んだ資料は燃やして処分していました。

セネガルで様々な“初めて”に出会いましたが、私が異文化に接したときに大切にしていることは、その違いにショックや壁を感じるのではなく、新しいものに出会えたわくわく感を楽しみ、現地のやり方にまずあわせてみることです。図書館一つにしても、その国の“普通”があります。学生の皆さんも海外に行かれる際は観光地だけで終わるのではなく、“その国の普通”に溶け込み楽しんでみて欲しいです。

展示紹介　学生による企画展示

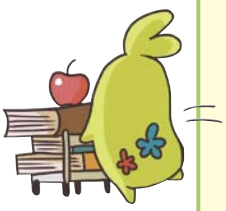
図書館では、オススメ本（本だけではなく、所蔵している資料ならDVDやビデオでもOKです）を紹介してくださる方を募集しています。興味のある方は、ぜひ参加してください。

2012年度に展示してくれた学生さんに展示に使用した資料の紹介をしていただきました。展示テーマとオススメの１冊を紹介していただきました。紹介した以外に展示に使用した資料のリストは、図書館にありますのでご覧ください。

日本語・日本文学科　3年　惟村さん

「図書館にある本」という固いイメージを覆したい！という想いから、なるべくパラパラと楽しんで読めるものとして【Photograph】というテーマで展示させて頂きました。女子カメラブームの今、写真に注目している人も多かったのではないでしょうか。私も女子カメラに興味津々の一人です。『未来ちゃん』は写真展に自ら足を運んだほど大好きな写真集です。子供時代というほんの一瞬を切り取った写真の数々には、時に笑わせられ、時にハッとさせられ、そして時に懐かしさと切なさがこみ上げてきて、胸が苦しくなる…。ただ「キレイ」「カワイイ」そんな言葉じゃ表せないような感情が１冊にギュッと詰め込まれた、宝石箱のようにキラキラ輝く写真集です。

『未来ちゃん』川島小鳥著　請求記号：748||Ka97（本館所蔵）



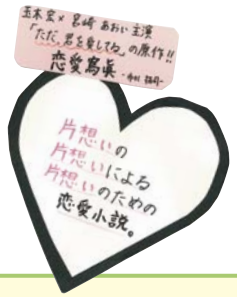
食物栄養学科3年　萬さん

今回は、【映画・ドラマ化された原作本】をテーマに紹介させていただきました。

中でも私がおすすめしたいのは『恋愛寫眞　もうひとつの物語』です。この本は「ただ、君を愛してる」というタイトルで宮崎あおいさんと玉木宏さん主演で映画化されました。「恋をすれば死んでしまう」という運命にありながら、初恋の相手に一途な片思いをつらぬいた切ない物語で、ベタな恋愛小説とは一味もふた味も違った作品です。

図書館には映画・ドラマの原作本はもちろん、映画やドラマのDVDも豊富に取り揃えられているので、ぜひ皆さんも映画やドラマをきっかけに原作本を探してみてはいかがでしょうか？映画やドラマとは違った世界観を楽しむことができると思います。

『恋愛寫眞：もうひとつの物語』市川拓司著
請求記号：913.6||I14（本館所蔵）



文化総合学科3年　船切さん

今回、私は【心あたたまる、時代小説】というテーマで、二人の女流作家（高田郁、畠中恵）による作品の展示をしました。彼女たちが描く小説は、温かさとやさしさを感じられ、とても読みやすいのでおすすめです。

『みをつくし料理帖』シリーズは、かつて大阪老舗料亭の奉公人であった少女・澪（みお）が主人公です。彼女は天災のため、江戸に移り料理人となりますが、関西と関東の味の違いに苦戦します。そして、澪は人の温かさ、時に世間の空しさを感じながらも、江戸庶民に喜ばれる料理づくりに励み、彼女の料理は江戸の料理番付に載るほど人気になります。すぐにでも食べたくなるくらい美味しそうな澪の料理の描写は必見です！

『みをつくし料理帖』（シリーズ名）　高田郁著
請求記号：913.6||Ta28||1-7（本館所蔵）

人間生活学科3年　木村さん

私は【おすすめサスペンス＆アクション】というテーマで映画と本を選びました。その中でも、特におすすめの映画『レオン』を紹介します。寡黙な殺し屋のレオンと、麻薬取締官に家族を殺された少女マチルダが出会い、交流を重ねていくというストーリーです。孤独だった二人が出会い、交流を重ねていく内にお互いを信頼するようになる様に胸を打たれます。アクション映画ですが、二人の交流のシーンがメインとなっているので、苦手な人でも楽しめます。特に注目してほしいのはゲイリー・オールドマンが演じる麻薬捜査官。このキャラクターが強烈な悪役で、登場するシーン全てが一度観たら忘れられない。レオンとマチルダも素晴らしいけれど、この悪役も最高です。観たことがない方は、是非観てください。

DVD『レオン』（花川館所蔵）

図書館からのお知らせ

入退館システムが新しくなりました

2013年2月から入退館システムが本館・花川館とも更新されました。今まで同様、入館の際には学生証（利用証）が必要です。

以前の機器は、バーコードを読み取る角度が難しく、入館に手間取る光景をみることがありましたが、新しい機器では性能がアップし、入館がスムーズに行えます。

利用方法など不明な点は、カウンター職員にお尋ねください。

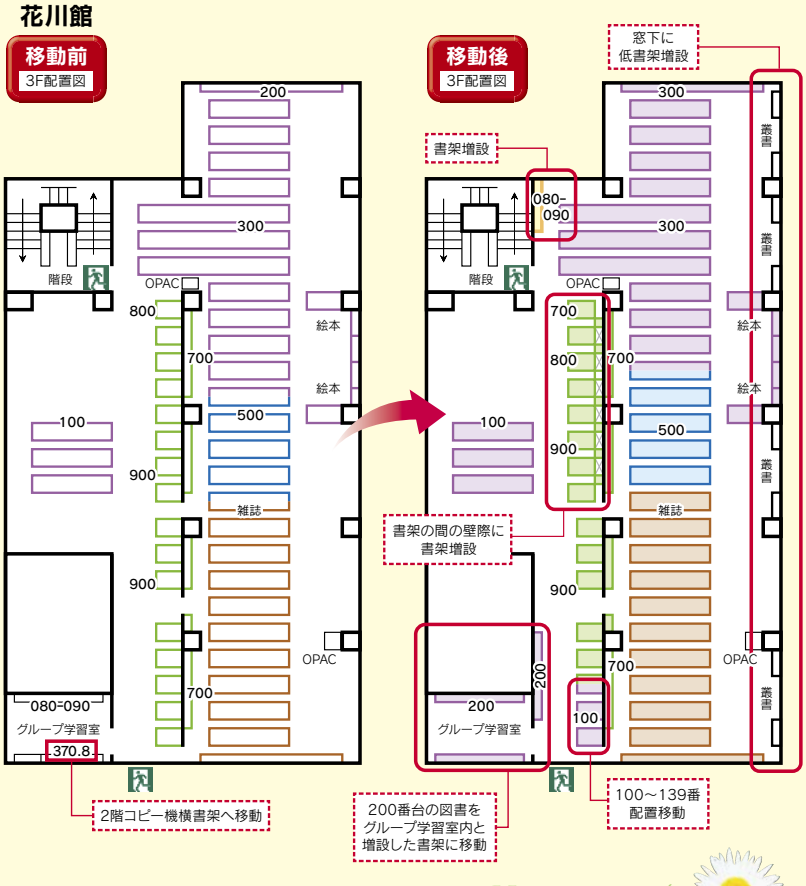
学生証（利用証）のバーコードを下にし、読み取り箇所に当ててください。音とともに自動でゲートが開きます。

書架が増設されました

本館は閲覧室北側（語学コーナー）の書架を増設しました。

花川館は3階に書架を増設し、資料の配置が変更となっています。（詳しくは右図の通りです）

資料が見つからない場合は、カウンター職員にお尋ねください。



図/書/館/資/料 Navi（ナビ） 第1回

Acta Sanctorum（アクタ サンクトールム）の編纂事業

―「一年」を終えるのに数世紀―

文化総合学科　渡邉　浩

actaは「行為、働き」、sanctorumは「諸聖人の」を意味するラテン語なので、Acta Sanctorumは「諸聖人の伝記集」ということになります。聖人とは、最後の審判を待つことなく、すでに天国に入っていると考えられている人々です。教会ではすでに古い時代から、使徒たちや福音書記者たちの他、迫害時代の殉教者たち、また、禁欲的な修行、正統教義の確立、慈善活動など、キリスト教的徳行を様々に遂行した聖職者、修道士、あるいは一般の信者たちが聖人と見なされてきました。教会はこれらの聖人を記憶に留めて称えるために祝日を定めてきましたが、毎日がいずれかの聖人の祝日にあたるほど、教会にはたくさんの聖人がいます。また、多くの聖人の周辺では、その偉業を伝えるために伝承や伝記、奇蹟録なども成立してゆきます。

17世紀初頭、フランドル地方で活動したイエズス会士H・ロスウェイデは周辺の修道院に豊富に伝わる聖人伝の写本収集と研究に携わっていましたが、真偽や歴史的根拠を吟味した上で写本を活字におこして出版することが、当時の教会の利益にかなうことと考えます。ロスウェイデの死後、同じくイエズス会士のヨハネス・ボランドゥスが事業を引き継ぎますが、彼は諸教会で崇敬を受けているすべての聖人を網羅する聖人伝集の編纂へと事業を拡大します。これが*Acta Sanctorum*の始まりで、この事業は、彼の名にちなんでボランディストと呼ばれるイエズス会士たちの共同作業によって引き継がれて今日に至ります。まず「一月」の巻（全2巻）［後のパリ版では全3巻に分割］が1643年、ついで「二月」の巻（全3巻）が1658年に出版されました。このように目次は聖人名によるアルファベット順ではなく、1月に祝日を持つ聖人、2月に祝日を持つ聖人というように、暦に従って構成されています。その後、ほぼ定期的に出版が続くものの、1794年の「十月」第6巻目の出版で中断してしまいます。フランス革命軍、ついでナポレオン軍のベルギー侵攻がボランディストの活動を中止させたためで、出版の再開は1845年を待たなければなりませんでした。実はこれ以前にも、出版内容に不満を持つ人々による異端審問所への提訴や教皇によるイエズス会の解散命令があったり、また以後には、二度の世界大戦におけるドイツ軍のベルギー占領があったりと、編纂事業をめぐる環境は決して平穏ではありませんでした。「一月」の出版から350年以上を経た今、*Acta Sanctorum*は「十一月」の第4巻までたどり着いたところでしばらく立ち止まり、一年の終わりを目前になおも事業は続けられています。批判的な精神をもって始まった事業とはいえ、19世紀以来の歴史学や文献学の進歩に照らせば不備も認められます。これらは、1882年に創刊された*Analecta Bollandiana*誌に掲載された論稿で補われていますが、「十二月」の最終巻が完結したあかつきには、その後の研究成果を踏まえて、新たな一年が始まることになるかもしれません。なお、本学図書館所蔵の*Acta Sanctorum*は1863年にパリで出版が始まったリプリント版（パリ版）で、「十一月」の第3巻までカバーしています。一方、*Analecta Bollandiana*については全巻が所蔵されています。

Acta Sanctorum　請求記号：190.28||A15||1-65　本館所蔵
Analecta Bollandiana　雑誌　本館所蔵

● 編集後記 ●

85号は「図書館という「場所」について」と題して巻頭言に木村信一図書館長、「セネガル図書館訪問記」と題して川邊さん（花川教務係・元図書課員）、企画展示に参加した学生の皆さんからご寄稿していただきました。

そして前号までは「図書館員のオススメ本」シリーズでしたが、図書館員のオススメ本も13回となり、85号からは「図書館資料Navi」と新シリーズになりました。第1回は渡邉浩先生にご寄稿いただきました。これは、図書館が所蔵するユニークな資料について専門の教員に書誌解題をしていただく企画です。

4月になり心機一転新しいことを始めたい気分になる時期ですね。図書館は入館ゲートが新しくなり、入館しやすくなりました。勉強はもちろんですが、興味のあることを深めるためにぜひ、図書館に足を運んでみてください。（W）

図書館キャラクター「きしんさん」

ケータイから本が探せます！

QRコード

藤女子大学　図書館だより　第85号 2013.3
発行者　藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目
TEL 011-736-5407　FAX 011-709-4770
http://library.fujijoshi.ac.jp/